

新
月

峰



2 月 号

第 5 卷 第 2 号

通 卷 第 33 号

目 次 —————— 2 月 号 ——————

巻頭の言葉

平凡なる殉教者、地にあふれるならば

自我偈講義△久遠の本仏と人間釈尊△第十二回

本仏釈尊と多宝如来

日高白象

信仰体験談

我が父は靈山の光りの中に

小寺崇元

信仰相談室

信仰の相続

日高白象

誓願の滝 行学道場の建設

第四回法華經講籍の集い

35

家庭戒壇

27

鷲峰学生僧の長期擊鼓行脚布教

13

地水のように

27

鷲峰会の活躍と賛助会員

36

鷲峰誌代の通算

32

編集後記

37

33

28

14

6

4

表紙題字・身延山法主藤井日静猊下
表紙写真・インド靈鷲山へ渡つた身延山金剛の釈尊像

地にあふれるならば

殉教者といえば、信仰をつらぬいて、法難に殉死して行く人々のことです。これらの人々は神仏の実在を確信し、自分の生命は本来神仏より与えられたものとして、「死すること帰するが如き」境地にあるものです。生きて地上の榮達も求めず、死して天上の榮華も求めず、ただひたすらに神仏の悲願の中に、自己の全生命を投じて行くのみです。

日蓮大聖人一代六十有余年の、大難四ヶ度小難その数を知らずといふ迫害に堪え忍ばれた忍難慈勝の生涯もまた、本仏釈尊の悲願に殉ぜんとするものであつたのでした。日蓮門下七百年の歴史をひといてみても、宗風宣揚の時代は殆ど、殉教の流血に色どられています。それは文字通り「身輕法重、死身弘法」の実践を物語るものであり、後陣の襟を正さずにはおかないものがあります。蓋し、ここで肝心なことは英雄的な流血の殉死そのものよりも、平素から正直に、自分の命よりも仏の命を尊び、自分の価値よりも仏の価値を重んずる、ということにはなりません。実は、このことが法華経信仰の根本でもあるのです。この根本より逸脱して、如何に現世

平凡なる殉教者

の利益を願い、死後の浄土を願つても、たとえ木にのぼつて魚を求め、南に向つて北斗をたずねるようなものでしかありません。

然るに、今日の日蓮門下の姿をみれば、既成教団といわば新興教団といわば、殆どすべての人々が、仏の命よりも自分の命を重じ。法華經信仰は生活を豊かにする方法、榮達の手段としか考えられていないような現状にすぎません。これは大きな顛倒であり逆法です。鉄が内より錆びるよう、宗門は、このような信仰によつて内より腐敗し衰退して行くのです。

そこで若し、正法を興隆し、宗風を宣揚せんと願うならば、日蓮門下の一人一人が自分の命よりも仏の命を重じ、「死すること帰するが如し」という殉教者の如き信仰を堅持することです。眞実の殉教者は、殉教によつて名を後世に留めようとも思いません。それは平凡な殉教なのです。蓋し法華經靈山虚空會上、本仏釈尊より法華經の別付囑をうけた六万恒河沙の地涌の菩薩とは、所詮かゝる平凡なる殉教者のことではないでしょうか。そして、こうした人々が地上にあふれることを広宣流布というのではないでしょうか。

久遠の本仏と人間釈尊 ▲第十二回▽

本仏釈尊と多宝如來

日 高 白 象



22

さて次に、見空塔品の經文を開いてみれば、多宝塔は曼荼羅華をふらし、その他の諸天・龍・夜叉……等の大涌出につゝいて、

——高さ五百由旬、総広二百五十由旬という、多宝塔には、五千の欄楯（らんじゆん）と、千万の龕室（がんしつ）があり、周囲は万億の宝鈴や、無数の幢幡、——

這樣的想像にも絶した、絢爛たる宝塔の様相が述べられてゐます。

七宝ちりばめた幡蓋をもつて飾られており、その高さは遙か四天王宮にまでも達し、塔の四面より発する栴

檀の香りは、三千大千世界にまでも充満し、三十三天は曼荼羅をふらし、その他の諸天・龍・夜叉……等の千万億の衆までも、華・香・瑠璃・幡蓋・妓樂をもつて、この多宝塔を供養し、恭敬・尊重・讚歎している——

く、また大乗仏教徒が経巻や仏像を安置していた塔廟のような形式のものでもなく、その規模にしても、一由旬が中國の三十里か四十里、一日の徒步行程というのですから、日本の六・七里に相当しており、仮りに六里（二十四キロ）としても、五百由旬といえば二〇〇〇キロ、二百五十由旬といえば六〇〇〇キロ、地球の直径は六三七一・八キロといわれているのですから、多宝塔は地球を上廻る大きさということになり、規模にしても様式にしても、全く前代未聞、史上未曽有というものなのです。

では、どうして、このような宝塔が、たゞ法華經に限つて涌出されたのでしょうか。インドの歴史にもなく、また一切經の中でも説かれていない多宝塔が、法華經のみに説かれたというには、そこに、それだけの理由というものがなければなりません。

そこで、この理由なるものをたずねて、見宝塔品の經文をたどつて行けば、

「宝塔の中の多宝如来は、実は想像することも出来ない無量劫の昔、既に滅度していた仏陀であり、しかもその全身は、何と舍利身であつて、舍利身は威然未散のものであつた」

と述べられていてことに気付くでしよう。

滅度した多宝如米の全身が舍利身であり、しかも無量劫の間、厳然として一分も散することなく、微塵も崩れることもなく、あたかもミイラの如く、端然として結跏趺坐していたということ、このことを釈尊のそれと比較するならば、それはあまりにも対照的であるというほかはありません。

何故ならば、釈尊の全身は、入滅直後、ダ毘にあされ、その仏舍身は、釈尊を信奉するインド各地の種族によつて八等分にされ、更に仏滅後およそ百年の頃に出現した阿育大王によつて、インド國中に造立された八万四千の仏舎利塔の中に、微塵の如く分散奉祭され

こうに、

「釈尊に帰れ。釈尊こそ久遠の本仏として、永遠に不滅である」

と叫んでやまなかつた法華經々典編纂者たちが、生身の教主釈尊を恋慕渴仰するあまり、みずから釈尊の言葉として自我偈の中に、

衆、我が滅度を見て

広く舍利を供養し

ことよく皆、恋慕をいたいて

渴仰の心を生ず

衆生、既に信伏し

質直にして、こう柔軟に

一心に仏を見たてまつらんと欲して

みずから身命を惜ます

時に我れ、及び衆僧

ともに靈鷲山に出で

と述べる心底には、

△滅度したはずの釈尊が、久遠の本仏として、なお嚴然として生きており、やむこともなき衆生救済の利益

を、常に限なく施されているという以上、釈尊の全身は、たとえ仏舍利としても、微塵も分散されたものではなく、靈山虚空会上、本門の法華經を常説法教化されている釈尊の、その面影を偲び奉るにふさわしい嚴然未散なる全身の舍利身であつて欲しかつた△

という心情が、当然、強く、且つ深く秘められていたことでしょうし、更に、この心情が、そのまま必然的に、また反射的に、多宝如来の上に投影することによつて、

「多宝如来の全身は、滅後、無量劫の間、嚴然未散の舍利身であつた」

ということとなり、更に、その多宝如来と釈尊が、多宝塔の中において二仏並座することによつて、それまで分散されていた仏舍利を通して生身釈尊を仰いでいた小乘佛教の在り方が、一転して、嚴然未散の舍利

身に即する釈尊を、久遠の本仏として仰ぐ、というよう
うに開顕されて行つた、とみることが出来ましよう。
則ち、自我偈の中の「広供養舍利」という、釈尊の
分散された仏舍利は、二仏並座によつて、多宝如来の
厳然未散なる全身の舍利身に即して、それに包摶され
その多宝如来もまた二仏並座によつて、釈尊に色相さ
れ、こゝに釈尊そのものが、生身のまゝに久遠の本仏
として開顕され、いるのです。

しかも、このことが多宝塔中において遂行され完成
されたといふところに、多宝塔自体の大いなる意義が
ある、とみなければなりません。

多宝塔の規模が、地球大といふ未曾有のものであつ
たということ、並にその様式もまた高広莊嚴なる未曾
有のものであつたということは、多宝如来が、三千大

千世界の虚空にあふれるばかりの三世十方の諸仏を、
総括的に代表し象徴するという未曾有の仏陀であると
同時に、この多宝如来と二仏並座した釈尊が、未曾有

の久遠開顕をとげ、未曾有の本門法華經を頤説すると
いうことにおいては、蓋し当然のことではありますよ
うが、この未曾有なる宝塔の様式によつて、小乗佛教
における仏舍利塔と、大乘佛教における經卷塔（仏像
塔）の両者を包摶象徴し、以つて仏滅後、幾世紀かに
わたつた兩者の久しき論争を、止揚統一しようとした
ものであるということ、並に包摶しようとした仏舍利
塔にしても、八万四千といふ龐大なものであり、經卷
塔・仏像塔にいたつては、三千大千世界の虚空にあふ
れるばかりの諸仏と、その所説の經卷を意味するもの
である以上、多宝塔の規模もまた、高さ五百由旬、縱
廣二百五十由旬といふ地球大のもとして、象徴せざる
を得なかつたものであるということが、うかゞわれる
と思うのです。

なお大乘教徒と小乗教徒の塔觀論争が、如何に激烈
にして執拗をきわめたものであつたかということにつ
いては、その片鱗が、両者を止揚統一しようとしたは

ずの法華經の、經典の中にさえ現われてゐることによつても、容易に想像されましよう。則ち第十章の法師品の中に、

在々所々に、若しは説き、若しは読み、若しは詠し、若しは書き、若しは經卷所住の處には、みな七宝の塔（經卷塔）をたてゝ、極めて高廣莊嚴ならしむべし。

また舍利を安することをもちいす。

所以は如何。この中（經卷塔の中）には、既に如來の全身います。（この故に）この塔をば一切の華・香・瑣珞・縉蓋・幢幡・伎樂・歌頌をもつて供養・恭敬・尊重・讚歎したてまつるべし。

——（註）筆者——

と述べられているのが、その片鱗なのです。

ところが、こゝに「また舍利を安することをもちいす」という、この一句を、金科玉條の如くみなして、

「法華經は仏舍利塔供養を否定するものである」

と称する人々が甚だ多いようですが、然しながら此

の一句は、実は法華經以前における旧来の大乘・小乗の対立を示すにすぎないものであつて、両者を開会統一しようとした法華經本来のものではないのです。そ

れにもかゝわらず法華經の中に、かゝる対立が、なお與入しているということは、その対立が如何に激烈であり執拗なものであつたか、ということを物語る何よ

りの証左であります。

かえりみれば大乘佛教徒は、仏舍利塔の点在している中央インドより、遙かに遠く離れた仏教未開の西北インドや、南インド地方において布教を展開しました。それは、仏舍利塔を中心とする小乘佛教徒が、独善的保守的な形式主義・貴族主義に墮ち入つてゐたことに對する、精神的・進歩的大衆運動であり革新運動でした。

然し、中央を遠く離れた此の地方には、おがむにも仏舍利塔はなく、仏舍利には數に限りがあつて、入手

する」とすら容易ではありません。

そこで大乗教徒は、みずから作った大乗經典を、如來の心のすべてをあらわすものであり、仏舍利以上に如來の全身を象徴するものとして、塔廟を建てゝは、

その中に本尊としてあがめ、

「この經典の一偈でも、受持・説誦・解説・書写して供養する功德は、小乘教徒が仏舍利を供養する功德よりも、遙かに勝るものである」

と強く主張したのです。

これに対して小乘教徒も、負けずに反撃しました。その勢いが、ことある間に法華經第十三章の勸持品二十行の偈文の中に、次のように現われているのです。この人（小乘教徒）恶心をいたぎ、常に世俗の事をおもい、名を阿練若（靜寂にして修行に適する處）にかりて、好んで我等（大乘教徒）のとがを出さん。しかも、かくの如き言葉をなさん。

と申せましよう。

法華經が一切開会の立場に立つ以上、こうした一切

むさぼるをもつての故に、外道の論義を説く。みずから此の經典を作つて、世間の人を誑惑す。名聞を求むるをもつての故に、分別して此の經を説く」と。
——（註）筆者——

則ち、大乘教徒が次々に大乘經典を、仏意にもとづいて創作編纂し、如來の真精神を顯説したものであると自負していたことに対し、小乘教徒は、その形式至上主義をもつて、痛烈な批判・反撃を加へてゐるのです。

勸持品二十行の偈文は、日蓮大聖人の法華經色疏体験史上、就中、上行菩薩の再誕といふ自覚に達する、重要な典拠を示すものであります。蓋し、その中述べられてゐるのは、何時の世にも変らぬ長老派と大衆派、保守派と革新派、形式派と精神派という对立の、激烈にして執拗なる抵抗の絵巻にはかならない

の対立をなくし、小乗仏教の仏舍利塔供養と、大乗仏教の經卷塔供養（仏像塔供養）との、多年にわたる激烈にして執拗なる論争（いわゆる本尊論争）をも、開会統一しようとしたことは、蓋し、当然な課題の一つであつたことでしょうが、このため仏舍利塔様式のものでもなく、經卷塔（仏像塔）様式のものでもなく、且つ両者を包摶した宝塔様式として、前代未聞、史上未曾有という多宝塔が涌出され、なおまた一切經中、曾つて出現したこともない未曾有の、多宝如來という仏陀が勸請されるに至つたのです。

未曽有という多宝塔が涌出され、なおまた一切經中、曾つて出現したこともない未曾有の、多宝如來という仏陀が勸請されるに至つたのです。

慧、教善薩法、仏所護念の妙法華經をもつて、大衆のために説きたもう。かくの如し、かくの如し、秋迦牟尼世尊、所説の如きは、皆これ眞実なりと、釈尊の説かれた未曾有なる法華經の、その眞実なることを讃嘆し証明しているのです。

「それじやあ、多宝如來という仏は、まるで化物みたいなものぢやないか」

といふ人もおられるかと思ひますが、蓋し、小乗教と大乗教の本尊論争を一挙に止揚し、あわせて諸大乘教における一切の諸仏も、その教法までも、悉く開会統一し尽そうとした、その構成の細密にして雄大なる見事さには、たゞ驚歎するほかはないと思ひます。この開会統一は、迹門における人間釈尊が生きたまゝ、死者の塔であるはずの多宝塔中に入り、舍利身であるはずの多宝如來と二仏並座して、みずから久遠実成を開顯し、本門の本法を開宣することによつて極点

何故ならば、このことによつて、小乗教の仏舍利塔と大乗教の經巻塔（仏像塔）を包摶した、いわゆる死せる多宝如来の宝塔は、もはや三世十方の諸仏を統一した、いわゆる生きた本仏釈尊の宝塔となり、且つ一切經をも包摶した法華經常說法の宝塔となつてゐるのです。

勿論、多宝塔にしても多宝如来にしても、実は、このための方便の化城であり、化仏にすぎないものであるということは申すまでもありません。方便の化城であり、方便の化仏であればこそ、靈山虛空会上、八品の儀相の終らんとする第二十二章の麁累品の結びにおいて多宝如来は、釈尊の告勅に従い、みずから宝塔の扉を閉し、十方分身の諸仏と共に娑婆世界を辞し、東方はるかなる宝淨世界へと帰つて行つてゐるのです。

このことは、法華經成立の過程からみれば、実は法華經々典編纂者たちが、そのように演出したこととも申されましようが、蓋し、その演出の当所に、

「本門八品虛空会上、二仏並座した釈尊と多宝如来は実は同格の仏陀ではなく、むしろその時の生身の教主釈尊こそ、たゞ一人の本仏なのである」ということを鮮明に、うたいあげようとした意図のほどを、うかゞい知ることが出来ましよう。
△以下次号▽

大聖人身延入山の聖路をたどる

鷲峰學生僧の長期擊鼓行脚布教

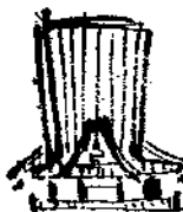
本年三月、立正大學を卒業する鷲峰会學生僧有志は、四月に入るや一丸となつて千葉県市川市日蓮宗木山弘法寺を出発、東京・横浜を経て鎌倉小町の本覚寺へ至り、これより文永十一年五月大聖人が身延え向われた聖路をたどり、大磯・小田原・足柄峠・御殿場・沼津・富士ノ宮・内房・万沢・南部を経て身延山へ至り、四月中旬より開設される信行道場に入ることとなつています。この長期行脚布教の道中、各所で隨時街頭說法も展開しますが、同行を希望される方は左記へお申込み下さい。

千葉県市川市真間町一丁目三六〇
日蓮宗木山真間弘法寺内

木村義賢

川島本良

我が父は靈山の光りの中に



小寺崇元

1

私が、はじめて本誌に寄稿したのは、身延山大学三年在学中の昭和三十九年、その年の本誌第二巻正月号に、「我が出家の動機」というシリーズの一環として、

風を物語りながら、その父が、高熱にうなされている幼少の私を、わざく九州熊本から、吹雪の京都のお寺までつれて来て、得度式をあげさせたという往時を回顧したことでした。

丸三年の歳月が流れ去り、父も靈山淨土へ旅立つて行きました。私が再び本誌寄稿のペンをとつたのは、ほかならぬ我が父の死に多大なる感銘を受けたからです。嚴肅なる父の死をまのあたりにしながら、

「我れ仏子と生れて」

と題し、厳しかつた私の父の僧

聞にも転載され、全国の読者より好評を受けたようですが、その後

生きている▽

という確証を得、この確証をもつて、一人でも多くの人々に、訴えにはおられないものがあつたからです。

2

私の家は、熊本市池田町新屋敷といふ上熊本駅の近くの崇心教会という小さな道場です。

子供は私たゞ一人、親子三人暮しでした。私が身延山高校に入学してより、身延山大学を卒業するまでの六ヶ年間、故郷の道場は、老いたる父母二人の力で護りつゝけられていました。

私が、大学を卒業して故郷へ帰つたのは、昭和三十九年の春でした。

た。時に父は、年すでに七十九才を数えていました。

然し、それまでは年にも似あわずカクシヤクたる父であつたのでですが、一人息子の私が帰つて来たという安堵もあつたのをしようか翌る四十年の春、忘れもしません四月三十日の午後四時三十分のこと、にわかに父が脳卒中で倒れ、どつと病いの床についてしまつたのです。

医者の診断では、「二・三日がヤマでしょう」ということでした。

事実、三日三晩、意識不明のまゝ、たゞコンクリーと眠りつゝけ、

一度も目を開くこともなく、もと

より一言も語ることはありませんでした。

然し、父が、このまゝ死ぬはありません。何故ならば父の生涯は、かたくなほどに法華經信仰の純粹性をたゞ一筋につらぬき、権力、財力にも屈せず、妥協も許さず、孤高の中に、赤貧に甘じながら、悩める人々を数知れないほど救済して來たのですから……。

あれほど靈力奇蹟を發揮して來た父、あれほど陰徳をつみにつんで來た父……その父が、脳卒中で倒れたとはい、目も開かず、一言もいわずに、そのまゝ他界するはずはありません。

八十才という枯木のようにやせ

た小柄な父の体に、かすかに脈うつ、その生命には、曾つて父が、多くの人々に与えた靈的な、偉大な天の息吹きが、今こそ豁然として、よみがえつて来なければなりません。

私は、それを信じました。母も信者もそれを期待していました。もとより私自身に、父のような靈的力があるとは思いません。然しまさに消えなんとして、いまだ消えざる父の命の灯に対して、

△仏天よ、大いなる天の命の油をそゝぎ、今一度、父の命の灯を燃やさしめたまえ▽

私は、父の枕もとに端坐して祈りつけました。食事のため席を立つ以外は、夜もねむらずに祈り通しました。

読経唱題の間には、身延山六ヶ年間の学生生活時代、身延の祖廟に徹宵唱題したこと、街頭布教で鼓銃宣令したこと、身延の奥之院や七面山の御来光を仰いだこと、或は身延山布教別動隊をまねいて熊本県下はじめての街頭布教を展開したこと、等々のことが走馬灯のように思い起されました。

或は、もの心もつかぬ中から、父の膝下に僧風教育をうけ、お経を聞違えたといつてはバチでなくられ、修行をなまけたといつては

水行場に引きすえられて、頭から水をあびせられた幼少のことまで思い出されて、今さらながら父の慈愛に感泣し、祈願の読経も嗚咽にとぎれ勝ちでした。

△お父さん、もう一度、目を開いて下さい。大学卒業後の私が、布教戦線に雄飛する姿を、みとけて下さい。お父さんの生涯は、息子の私が、法華經宣布の大木となるために、みずから大木を育てる土となつて來たのですから……△こうして一日がすぎ、二日たちそして三日目の夕刻のことでした今まで石のよう堅く閉されてた父の両眼が静かに開かれたのです。そしてすき通るような、柔し

いまなざしをしながら、私の方へ顔をむけるや、一言、

「おなかが、すいたなあ……」

と言つたのです。

それは私たち周囲の者の、極度の緊張を外に、何時もの眠りからさめたような、日頃と少しも変わぬ言葉すらかいでした。

父としては脳卒中で倒れて以来

三日間、意識不明のまゝ眠りつづけて、何も食べてはいなかつたのですから、意識が回復すれば、おなかすいた、と思うのは当然なことでしよう。

然し、この三日間、ひたすら父の枕もとで見護りつづけ、祈りつづけて来た私たちにとつては、ま

さしく天の奇蹟を仰いだ思いをしない者はありませんでした。

母も信者も、うれしさのあまり

その場に泣き崩れてしまい、私とかも、踊りあがらんばかりの気持をどうしようもなく、御宝前にぬかずいては、幾度も幾度も御札を申上げたのですが、その時、どのような言葉をもつて御札を申上げたのか、思い出せないほどです。

然し、八十才という年が年だけに、母も私も、何時、父が今度のように、ボツクリ行くか判らない思つていた。よく助つたものです

「正直にいつて、もう命はないと思つていた。よく助つたものです

なかすいた、と思うのは当然なことでしよう。

と驚かれましたが、そうと聞い

命が、私たちのような者の祈りによつて助つたのですから……。

その後、五日間ばかり父の体は左半身が中風にかゝつて、手足も

動きませんでしたが、それも日増しに快方に向い、やがて筆をとる手もふるえることなく、寝たり起きたり、病後の好き勝手な毎日を送つていました。

こうして、この年もすぎ、翌る四十一年度の身延山寒一百日間の

大荒行堂に、学生時代よりの無二の親友であつた京都府下福知山の沢田覚象君と一緒に入行するため夏の頃より、ボツ／＼入行準備を始めました。

九月になつて東京の宗務院より入行許可証がおりて来ました。身辺も急に多忙になつて来ました。身入行するためには、自分自身のことだけではなく、留守中一百日の、生活体制も整えておかねばならないからです。

多忙な毎日がつゞいていましたと、ある朝のお勤めの時、母が突然、私や参拝に来ていた信者さんに向つて、「今、お題目をあげていた時、隨

分、消毒の臭いがしていましたね……」

と、いぶかしげに尋ねたのです
もとより私たちに、そんな臭いは全然解らはずではなく、

△お母さんの気のせいだろう△

と別に問題にもせず、そのままにしておりましたが、母には何だか納得がいかず、その後も気がかりになるのか、不安な毎日を過してましたようでした。

既に父は、八十一才という高令

です。しかも全快はしたものゝ、

一度は脳卒中で倒れた体です。私が荒行堂入行中に、万一件ことがないとは限りません。唱題中に漂つた消毒の臭いが、たとえ母だけ

にしか臭わなかつたにせよ、その臭いが、父の死を知らしめるものではないとは限りません。入行の日が近づくに従つて、母の焦慮が、いよいよ強くなつて行つたのも、薰し当然のことであつたでしよう

十月に入つて、荒行堂で必要な荷物を、身延山へ発送した日のこと、母が父に向つて、

「いよいよ崇元が荒行に入りますが、出発前に、何かおつしやることはありませんか」

と二・三度たずねてきました。

それは万一件の場合をおもんばかりた母が、私に対する父の、最後の言葉を残させようとしたのであります。然し、その都度、父の

言葉に、変りはありませんでした

「何も言うことはない。体を大切
にするように……」

たゞそれだけで、母の憂慮には
全く頗着もなく、また多く語ろう
ともせず、何時ものように淡淡と
していました。

然し、今にして思えば、父のこ
の言葉こそ、私をして安心して荒
行へ送り出すための大慈悲であつ
たのです。

迫り来る死期を覚悟しながら、
ともすれば溢れんとする老いの涙
をおしゃくしつゝ、これまで親と
して師として、教えることは教え
尽しておつたれこそ、気丈にも
「何も言うことはない。体を大切

にするように……」

と、知つて私を励ましたのです
然し当時の私は、そうした深い

父親の思いやりを知るよしもなく
十月の中頃、早目に熊本を出発し
ました。

というのは途中、福知山で沢田

君と一緒になり、共に身延の本妙
庵で、数日修行してから入行しよ
う、と楽しんでいたのですから。
いよいよ熊本をたつ朝、

「お父さん、では行つて参ります
元気で良い新年をお迎え下さい。

そして春まで、私の帰りを元気に
待つていて下さい」

と挨拶しました。この時、父は
一言もいわず、私の肩を歎だらけ

の、しかも力の入つた手で、やさ

しく二・三度たゝいて励ましてく
れました。父の眼には涙が光つて
いました。恐らく父は、万感せま
つて一言もいえなかつたのでしょ
う。

この時、私の肩を、やさしくた

いた父の手が、その手の重みが
八十一才の枯枝のような父の手の
重みが、今なお私の肩に残り、千
金の重みとなつて、心に響く思
がします。

この時、父は一言も語りません
でした。然し、私の肩をたゝいた
父の手は、今なお私に語りつづけ
ます。

「崇元よ、法華經のために立て。

立正安國のために立て。如何なる

苦難にあおうとも、法華經信仰の

節を屈してはならない」

私の肩に残る父の手は、今後と

も、限りなく私の心に語りつづけ

て行くことでしょう。

父の手、それは八十年の生涯
を法華經に捧げて、おがみぬいた
手であり、数知れない人々を救つ
た手であり、死後の法華經弘通を
私に托した手であつたのです。

4

熊本をたつ時、一口に百日とは
いえ、老いた父を残して行くには
さすがに後髪を引かれる思いを禁
ずることは出来ませんでしたが、

△法のため△

と、我れと我が心を励まして駅

「小寺君、電報が来ているよ」

へ急ぎ、母や信者一同に見送られ

て、一路、京都府下の福知山へ向

いました。

福知山では、沢田君をはじめ家

族の人々から、温かく迎えられま

した。彼とは昭和三十九年の夏、

熊本の本妙寺をふり出しに身延山

まで、四十六日を要して擊鼓踏破

した仲もあり、今度、一緒に入

行するに当つては、福知山の「妙

法の滝」で二・三日間、共に滝の

修行もしておこう、と申しあわせ

ていたのです。

ところが十月二十一日の朝、朝

をお勧めのため、御宝前にお線香
をそなえようとしていると、
「小寺君、電報が来ているよ」
という沢田君のお母さんの声が
しました。
△電報……一体どこから、何の電
報なんだろう？△
まさか、父の容態が悪くなつた
とは、夢にも思いませんでした。
熊本をたつ時は、あんなに元気に
しておつたのですから……。
電文は次のようにでした。
「チキトク、スガカエレ」
私は愕然としました。棍棒で頭
をなぐりつけられたような衝撃で
した。凍りつくような冷い恐怖が
背筋を走り、大地一杯にひろがつ
た底知れぬ不安が、足もとよりは

いあがつて来ました。

もはや何を考え、何をどうしたらしいのか見当もつかず、たゞオロオロするばかりでした。ともかく荒行黨の入行を断念して、一刻も早く熊本へ帰りつかねばなりません。汽車の時間表をめぐりましたが、すつかり動転している私の眼に、文字の読めるはずもありません。代つて沢田君が調ぶれば、あと十分すると、山陰廻りの博多行き特急「まつかせ号」が福知山駅に入る、と判りました。

あと僅かに十分、私は取るものも取りあえず、沢田君のバイクで駅へかけつけました。駅員に事情を打ちあけ、座席のないまゝ特急

に飛び乗りました。

然し、特急であるはずの此の列車ほど、速度のろいのに、いらだたしく思つたことはありません。気があせればあせるほど、列車はのろいのです。

居ても立つてもおられず、デツキに立つてお題目を唱えつけました。日本海の青い海も、鳥取りの砂丘も日にうつらず、溢れる涙をぬぐいながら、一心にお題目で念じつゝけました。

△危篤の父、その父の寿命が、もう既につきていたのなら、その分だけ私の命を縮めていいから、せめて、死に目にだけは、あわせて下さい

私は、何度も何度も、三宝諸天に訴えました。訴えながら祈る私的心によみがえつて来るのは、私の荒行入行を見送つた時の、父の元気な姿でした。

△あの時、父は既に死を覚悟していました。覚悟しておればこそ、残り少なき命の火をかきたて、敢て元気をよそおいながら、私の入行を見送り、私が熊本をたつた後、精根つきはて、ローソクの火の消えるように、まさに消えようとしているのだ

△ローソクは、自分の体をへらしながら、あたりを照す。父もローソクの如く、みずから身をけずつて、人々の心の闇を照して来た

そして最後の光りを、燐然として
私にそよいで、今まさに、ローソ
クのようにつきとうとしている

思えば思うほど、父の慈愛の深
さに、感泣するばかりでした。そ

して、悲しみにふるえる肩には、

故郷をたつ時、柔しく励ましてく
れた父の手の重みが、今さらの如
く、ずつしりと感ぜられるのでし
た。

何時間、デシキに立つていたこ
とでしよう。車掌が、

「席があきましたから……」

と案内してくれましたが、席に
ついても、心は落ちつかず、

「落ちつくようにな……」

と福知山の駅で、沢田君が買つ

てくれた本を開いてみても、何を
見ているのか焦点も定まらず、気

がつけば朝から、何も食べてはい
ませんでしたが、夕刻になつても
食欲など起らうはずもありません

でした。

人生か死か、いずれにしても熊本
についたら眠る暇はない。今の中
少しでも睡眠をとつておかなければ
ばならない……

と思つて、無理に眼を閉じても

却つて眠はさえ、胸の内で唱える

お題目も、思わず口からはとぼし
ることさえ、屡々ではありません

でした。

急に激しい腹痛を覚えました。さ
し込むような腹痛でした。

へしまつた！これが父の、死の知
らせではないのか……

私はデシキに走り立ち、故郷熊
本の空へ向つて合掌しました。

「お父さん、生きていて下さい。

いま少し辛抱して、私の帰りを待
つていて下さい。」

「三宝諸天さま、どうか、父の死
に目にあわせて下さい。一目でも

いいから、父にあわせて下さい。」

涙よきあえず、デシキに立ちす
くむ中、午後八時五十五分、列車
は博多駅のホームに入りました。

ここで熊本行きに乗り換ねば
なりません。然し連絡は悪く、お

よそ二時間二十分も待たねばなりません。

よし、その列車に乗つたとしても、熊本につくのは、夜中の一時すぎになつてしまします。

今は一刻一秒も争う時です。私は

駅の前のタクシーの運転手に、簡単に事情をうちあけ、熊本直行をたのみました。運転手は深くうなずきました、タクシーは熊本めざして、夜の国道を疾走しました。それは文字通りの疾走でした。人気もない街道では、時速一二〇キロも出したのですから……。

タクシーが家の前で停つたのは夜の十一時チャストでした。戸を開けるのも、もどかしく内へ駆け込めば、父は意識不明のまゝ、私

の帰りを待つていてくれました。

苦しみもせず、静かに眠りつゝけながら、私を待つていてくれたのです。

△間にあつて、よかつた▽

それが、その時、私の気持のすべでゞした。

「お父さん、お父さん、解りますか、僕です、崇元です」

私は、あたりはゞからず大声で父を呼びつけました。何度も何度も、声を限りに呼びつけました。

すると、どうでしよう、父がパ

ツチリと眼を開き、私の顔を優しくみづめながら、静かに、につこりとほゝえんだのです。

あゝ、これが現証でなくて一体

何でしよう。危篤状態に落ち入つた前日から、一度も眼を開くこと

もなかつた父、他の人々が、どんな大声をもつてしても、答えようともしなかつた父が、私の声で眼を開いてくれたのです。

そして父は、につこりほゝえみながら、静かに二・三度、うなずきました。満足し切つたうなずきでした。大いなる仏陀の慈愛につまれているかのような、静かなうなずきでした。それが父の最後でした。

母をはじめ、父によつて改宗した大勢の信徒の見守る中、その音唱するお題目の声と共に、父は八

十一年の、苦難多かりし生涯を、
静かに閉じたのです。時に十月二
十二日の夜は、白々とあけそめて
いました。静かな朝でした。

やがてガラス窓を通して射し入
る朝日が、やわらかく父の斎を照
しました。一瞬、父の顔が輝いた
ようでした。あたかも靈山淨土の
久遠の光りに摄取されたかのよう
に……。

嚴肅なる父の死、私は暫し、涙
も忘れ、声もなく、冷たくなつた
父の、しづだらけの手を、強く強
握りしめたまゝ茫然としていまし
た。

その夜は、型通りの御通夜でし
た。葬儀の手配などをすませ、一
段落して、御通夜の読経をしてい
た時、こらえていた涙が

堰を切つたように溢れて来て、お
経の声も出ず、はじめてその場に
大声をあげて、男泣きに泣き伏し
てしましました。

法華経は灯の如く
行者は油の如し

檀那は油の如く

行者は灯の如し

赤貧に甘じながら、たゞひたすら
に法華経の灯をもやす油となり、
信徒を導く灯となつて来た八十一
年でした。

然し、もはや父の、その姿に接
することは出来ません。呼べども
叫べども、父は再び生き返つては
来ないのです。そう思えば悲愁の
涙は、後から後から、とめどもな
く溢れ、読経も途絶えがちでした
ところが、読経から唱題にうつ
る頃、溢れる涙に変りはなくとも
何時しか悲しみが悲しみでなくな
つて來ていたのです。これは、自
分ながら全く納得の行かない、ま
るで嘘のような出来事でした。恐
節を曲げず、寺も僧階も求めず、
らく私の心中に、

八父は死んだのではない。命が消えてなくなつてしまつたのではな

い。今後、たとえ私が、如何なる處にあつても、如何なる苦しみの谷底にあつても、父の靈は、常に私と共にあり、何時も強く、また優しく、私を導いてくれるであろ

う。

という確信が、湧き起つていたためかも知れません。

いや、それよりも、父の臨終そのものに、もつとも大いなる意義を見出したうめといふべきであ

りましよう。

父の臨終……それは、駆けつけた私の声に眼を開き、無言のまゝ私をみつめ、無言のまゝほゝえみ

ほゝえみ、無言のうなずきこそ、三千年の昔、大聖釈迦牟尼世尊が

大法を摩訶迦葉尊者に付囑せんとして枯華微笑されたという、その故事を思い起すならば、まさしく

それは、法華經の血脈相承を成就せんとする、死の直際に立つた數瞬の、嚴肅きわみなき無言の儀式であつた、と思わざるを得ないのです。

いな父は、たゞ一人の子であり弟子である私に対し、法華經の大事を実証されたのです。それは父の畢生の、声なき最後の説法でした。

お通夜の読經中、私は、この父を父とすることの出来た子の幸せを、しみじみと感ぜずにはおれませんでした。

が生命を、最極限点にまで持ちこどそれだけのことでした。

たえ、またこれを成就することによつて、日蓮門下僧侶としての生涯を完成した、といわるべきであります。

まず臨終の事を習うて

後に他事を習うべし

という大聖人の御言葉がありますが、父は、みずから死をもつて、無言の中にも、この臨終の大事を実証されたのです。それは

父の畢生の、声なき最後の説法でした。

また、この父を父としてもつことの出来た誇りは、到底、如何なる言葉をもつても言いあらわすことは出来ないものです。

私は幼少の頃より、父から多くの教えをうけて来ました。然し最後の、この声なき説法は、私の一生涯、私の胸の中に、熱く、強くそして深く刻みこまれ、永遠に離れることはないでしょう。

けれども、やろうか、やるまいかどうしようかと、実は戸惑つていて……と言わながら、涙拭いておられました」

そうと聞いて、はじめて父が、本当に自分の死期の迫つていることを知つてたいのだ、ということがはつきりしたのです。

法の前には毅然たる父ではあっても、人の親としては、親なるが故に子に迷い、戸惑い、涙する弱い人間であったのです。

「何も言つことはない。体を大切にするように……」

とだけ答えた父、出発の朝、何も言わず、涙しながら私の肩をたたいてくれた父、その父の言葉、

その父の涙こそ、八十一才という老いの身の、既に死期を眼目に覚悟しておればこそ、人間の弱さ、その脆さと必死に戦いながら、法のために立たんとする我が子の、修行の門出に送る、最後の祝福であつたのです。

生涯、私の前には何時も氣丈であつた父、然し、その強さは、とばしてくれ、と一言、いつくつかつたのでしよう。母が再三「言つておくことはないですか」と尋ねた時も、

葬儀の日、一人の信者さんが、このようにもらしました。
「私が道場にお参りした時、お父さんは……このたび崇元が、荒行入行のために、身延のお山へ登る

強さであり、忠実に法華經信仰を
つらぬかんとする強さであつたの
です。

権力にも財力にも屈せず、毀誉
褒貶に節を曲げることすらなかつ
たのも、このためでした。こゝに
法華經に生きる者の一大事血脉が
あつたのです。

また、この血脉があつたればこそ、
臨終の眞際、如何に身は遠く
離れてはいても、仏天の加護を得
て、死に目に間にあい、手を握り
お題目を唱えながら、最後の別れ
をつげることが出来たのだと、固
く信することが出来るのです。

私の今後の道は、臨終の際の、
父の無言のほゝえみ、無言のうな

ずきの中にかわされた、法華經の
血脉相承に生きるほかはありません。

私の胸中、熱く、強く、深く焼
きついた父の、声なき説法に生き
ることこそ、父に対する最上の孝
養であり、供養であると思うので
す。

父は靈山の雲の彼方にかくれた
のではなく、靈山の光りの中に、
仏祖三宝と共に、常に私を見護つ
て、私が唱題する時、父の声なき声が聞えて来ます。
「崇元よ、法華經のために立て。
立正安國のために立て。如何なる
苦難にあおうとも、法華經信仰の
節を屈してはならない」

家庭戒壇

大聖人開闢された三
門の題目そして本門の戒壇で
あることは申すまでもありませんが、家庭における戒壇は
この本門の本尊に向つて、本
門の題目を受持するところの
家庭戒壇にはかなりません。

従つて戒壇は、あらゆる家
具の中でも最も勝れたもので
あり、莊嚴清淨でなければな
りません。

仏壇の製造と卸しをさせて
頂いている者として、常にこ
のことを念じ、み仏の心に添
うて皆様の御要望に応うべく
精進するものです。

福岡県直方市古町銀天街
長谷川戒壇店
電話直方 (0534)

信 仰 の 相 続

解 説 日 高 白 象

お た ず れ

私たち老夫婦は、共に七十の坂をこえ、人生に何の不満も思い残すことありませんが、たゞ一つ気がかりになることは、子供たちが信仰しないことです。

子供たちといつても、みんな成りして家庭をもつてゐるのですが殆ど信仰には無関心なのです。若いので無理もないことは思いますが、私たちが死んだ後、子供たちが御先祖さまを、果してお守りしてくれるこことやら……不安でなりません。

知りません。

どうすれば子供たちが、法華経の信仰を相続するようになるのでしょうか。今生における私たちの後の仕事として、その方法を教えて下さい。

生きている間は、私たちのこととを、何かと面倒をみて、親孝行も

尽してくれますが、死んだ後の私たちに、お経の一つでもあげてくれるかどうか、疑わしく思うと淋しくなつてしまいます。

せめて、私たちが生きている間に、一日も早く子供たちが、信仰するようになつてもらいたいと思うのですが、私たちでは入信させるほどの力もなし、さりとて子供たちを説得出来そうなお坊さんも

おこたえ

全く無関心も甚しいという有様です。

まことに切実な御質問ですが、このことは人生にとつて最も重大な関心事でなければならないことだと思います。日蓮大聖人は、

誠の宝よりも身の宝

身の宝よりも心の宝第・なり

と仰せられています。そこで財産を相続することよりも、信仰を相続することの方が、最も大切な相続であると申せましょ。

ところが、世の中の殆どの人々は、財産相続ということには血眼になり、血肉あいはむ、みにくい争いでも引き起しているようですが、信仰相続といふ点になると

こうした風潮の中につつて、眞剣に信仰の相続について留意し、これを今生における最後の仕事とまでも考えられている御志しのほどは、全く敬服に値するものと申せましょ。

ところで親の平素の信仰が、子供にまで浸透していかつたとい

うことには、その信仰自体に反省すべきものがあつたのではなかろうか、とも思えます。

さりとて、その信仰が独善的であつたとか、観念的であつた等と批難するのではありません。

「法華經の修行は、自行と化他に亘り、むしろ化他の中に自行の完成をみる」

といわれているように、他を教化利益するという化他の方があ自分自身の修行である自行よりも先行し、むしろ化他行そのものが自行とされているのです。

たとえば学校の先生が生徒を教えるには、まず自分がよく勉強し

個の魂の問題なのですから、個人的なものではありますけれども、

法華經の信仰にあつては、人間社会が連帶性をもつてゐるよう、その修行も連帶性を、しかも強くもつてゐるのです。

て理解しておかねばなりません。

しかも人を導くという以上、慈愛の心が豊かでなければなりません。学校の先生というものは、生徒を教導するという行為の中に、自身が練成されているのです。

信仰も同様であつて、人々に信仰をすゝめ、信仰を増進せしめるという化他の行為によつて、自行が推進されるものであり、化他の喜びは、そのまゝ自行の喜びとなり、化他による反省もまた、そのまゝ自行の反省となるのです。こゝには、自分で自分に妥協することの許されない厳しさがあります。その厳しさが、自身の信行を躍進させ、より強盛にせしめて

行くのです。

通常、化他といえば布教、布教といえば在家には直接関係のない宗教家の、專業とみなされて来ています。これは大きな誤りです。在家も化他行の中に自行を推進するのでなければ法華經の信仰を全うすることは出来ません。

勿論、在家の化他行は、血縁關係や友人・知人関係といふ限られた小範囲のものであり、宗教家の化他行は、有縁無縁を問わない広範囲なもの、という相違はあります。然し、化他の内容そのものに変りがあろうはずはありません。

信仰する人は誰れども、先祖を供養し、家内安全を祈願します。蓋し先祖供養も家内安全の祈願も実は化他行の一つなのです。先祖の頤証菩提・仏果増進を祈ることは、先祖に対する立派な化他行であり、家族の健康と多幸を祈ることも、家族に対する立派な化他行になつてゐるのです。

然し、このことが形式的に流れたり、お寺だのみになつてゐるならば、自分自身の化他行にはならず、自行も散漫と化して、信仰の相続も起りようはありません。

六親九族の先祖の靈が本当に成仏しているかどうか、真剣に考えてみたことがありますか。

家族の一人一人の喜びや悲しみも、

遂一御宝前に報告し、喜びを感じ
し、悩みを解決して頂けるよう、
お導きを祈つたことがありますか
人間の罪の最大なものは、法華
經を誇り、乃至は法華經をないが
しろにした「誇法の罪」と申され
ていますが、この罪を心から懺悔
したこと�이ありますか。

信仰は日常生活に即する具体的
なものでなければなりません。具
体的であればこそ、真剣にもなれ
るのです。

子供たちが信仰に無関心でいる
ということ、それは親の信仰が具
体的なものでも真剣なものでもな
かつたということであり、先祖供
養にしても家内安全の祈願にして

も、自分の化他行にまでなつてい
なかつたことを物語るもの、と申
しても過言ではないでしよう。
のみならず無信心であるという
ことは、とりもなおさず三宝護念
の中にありながら、これに感謝す
ることも知らず、先祖より受けた
身体でありますながら、これに対する
感謝の念もないということです。
そこで今、こゝに信仰の相続を
願い、子供たちが入信するように
と願うならば、三宝諸天に対し、

先祖の靈に対して子供の不孝を、
親が代つて懺悔し、懺悔するばか
りでなく、唱えねばならない子供
の分までも、親が代つてお題目を
唱えることです。

「どうか一日でも早く、子供たち
が法華經を信仰しますように、そ
して信仰相続が出来ますように、
お導き下さい。そのためならば、
たとえ臨終の眞際に至るまで、子
供に代つて、子供の分を信仰させ
て頂きます」

この祈りが真剣であるならば、
至誠は必ず仏天に通じ、天の導き

によつて、必ず信仰相続は成就さ
れるはずです。

蓋し、この行を毎日／＼欠かさ
ずに行なうことは、さぞかし、つ
らいことでしよう。涙のにじむほ
どの、つらさをかみしめることで
しよう。然し、涙ふき／＼お題目

を唱える時、

島と虫とは鳴けども

涙おちす

日蓮 泣かねども

涙ひまなし

と仰せられた大聖人の涙のお題目に通じることが出来るのです。これこそ、誠の法華經修行の実踐と申せましょ。

もとより、法華經信仰の血脈は内相承にあるのですが、然し、これまで外相承の縁がなくてはなりません。

どうか、みずから内相承の位に入ると共に、臨終の利那に至るまで、家族の人々の上に外相承の縁が結ばれますよう、真剣に化他の唱題修行をおはげみ下さい。それが何よりもまして三宝の恩に報ゆる道であり、家庭成仏の道なのです。

く、ひとえにお題目を但信口唱したということのはかはありません。どうか、せつかく唱えられるお題目は、自分自身のためのものでなく化他行の故の菩薩のお題目ばかりであつて欲しいものです。

賀 春

地下水が絶え間なく大地の底に流れ、いたる処に清水となつて吹き出ていますように、驚峰会の脈々たる行法が日本國中にひろがり、すべての人々の心をうるほし、洗い清めますよう、何時も北海の果てより、信徒と共に祈りしています。

既に老境にあらる御質問者に

つて信仰に入ることであり、内相承とは、みずから信心決定して本化地涌の菩薩という不退の位に入り、久遠の本本釈尊と父子一体となることです。

利那、人界受生一期の思い出となるものは、俗的な富や名声ではな

驚峰讀助会員 本間妙海
北海道三笠市弥生桜木町

誓願の瀧 行学道場の建設

福岡県田川郡赤池町、福智山山腹の上野峠は、「白糸の滝」という名瀑を中心とする天下景勝の地であり、鷹取城趾や、天下の名陶「上野焼」と共に脚光をあび、県立公園から国定公園に昇格され、日下こゝを起点として、

福智山脈（海拔九〇〇メートル）を縦断し、遠く玄海灘を展望する雄大なるスカイラインが、北九州市と直方市へ貫通しようとしており、ゴルフ場等の建設も予定されていますが、実は、この上野峠の渓谷の上流、人跡未踏の地に、曾つて日高上人が立正大学の学生時代、小屋をかけて二十一日間参籠修行し、日本人のすべての人々が、特に郷土の青少年が、

という日蓮大聖人の三大誓願を、みずから誓願をするように、と祈つて岩題目を刻み込んだ剛壯にして幽邃なる瀑滝があり、「誓願の滝」と名命されて、近年参拝者の数も少くありません。

御承知の如く日高上人は、日蓮宗門徒頭布教の開拓者であり、先導者として毎年福岡県街頭布教のため身延山より西下されていますが、たま／＼昨年の夏、県下各地の巡回講演布教の折、「誓願の滝」へ登詣し、曾つて小笠原宿公が守護神としていた福智山の龍神を感じ、大智徳龍王として勧請しましたが、その日、不思議にも、国定公園の心臓部に当る「白糸の滝」の前の、三階建と二階建と平屋の三棟が譲渡されることとなり、県下の薦峰賛助会員であり日高上人の法友でもある八幡龍潛寺の松尾周輝上人、田川蓮華寺の松代義

我れ日本の柱とならん
我れ日本の眼目とならん
我れ日本の大船とならん

円上人、門司大雄寺の刀禪義留上人、柳川台照院の宮崎隆道上人、等々が発起して、こゝを法華經の行学道場（九州信行道場）とすべく、

建設予算 五百万円

を目標として同志糾合しつゝ銳意その準備を進める運びとなりました。右の経過については、本誌に詳細に掲載されることと思いますが、幸い地元の赤池町長

をはじめ役場当局、観光協会までも全面的に協賛し、「四國の八十八ヶ所のような法華の靈場を、上野峠から福智山全域に亘つて建設してもらいたい。必要な地所は快く提供する」と申し出しており、これが実現するならば、国定公園はそのまま法華經の靈場となり、九州地方における正法広布に貢献すること大なるものがありましよう。まさに歴史的事事業であります。

学を卒業した鷺峰会青年僧が数名、行学道場に参籠して、山道を開き、靈場敷地の整地作業をしながら、随時、県下に街頭布教を展開する予定でいますが、この間、県下希望寺院檀信徒の青少年をあすかり、自主的な法華信行を中心とする林間学校を開設し、寺院住職と共に、互に主伴となつて青少年指導に当ることが計画されています。

若し、これが軌道に乗るならば、大聖人の誓願を生涯の誓願とする青少年が、九州各地に陸続として輩出し、次代の宗門を背負つて立つことでしょう。既に矢は放たれました。この一大仏事は九州寺院檀信徒、ならびに鷺峰誌友をはじめとして十方協賛のもと、是非でも実現しなければなりません。切に御支援のほどお願いする次第であります。

誓願之流行学道場建設委員会

なお本年六月より一百日の間、立正大学や身延山大

連絡事務所 北九州市八幡区祇園町 龍潛寺

第四回 法華經講鑽の集い 御案内



講師 立正大学教授 執行海秀先生 道順 横浜駅より京浜急行（各停電車）にて井土ヶ谷駅下車、改札口を出て右へ二十メートル、バチノコ店左横のドア（法華經講鑽の集いという張紙あり）をあけ、正面階段をあがる。

久遠の本仏と教主釈尊
——特に念佛・釋・真言・

創価学会・キリスト教の本

参加 誰でも自由、会費不要、但し夕食は自弁

尊観と対比して——

座談会 右の講義の後、執行先生を中心として質疑応答座談会を開催

司会者 驚峰主幹 日高白象先生

日時 二月四日（第一土曜）午後六時三十分より午後九時三十分まで

会場 横浜市南区土井ケ谷中町一六一

大乗物産株式会社（社長、猪瀬秀成氏）本社
二階。電話一横浜（七四）〇九四二、或は

（七四）四五七一三三

驚峰会

「法華經講鑽の集い」は昨年十一月より毎月一回、第一土曜の夜、右会場において日高主幹の「久遠のいのち——その時と人と教と国について……」と題する連続講義を開講して来ましたが、特に二月は、このシリーズの一環として日蓮教学の権威であり日高主幹の恩師である立正大学教授の執行海秀先生をおまねきし、右講題のもとに有意義なる集いを催す運びとなりました。近郊の驚峰読者は友人おさそいあわせの上、ふるつて御参加下さいますよう御案内申上ます。

鷲峰誌代の通算

鷲峰会の活躍と賛助会員

本誌は昨年まで、やむえざる事情のため、しばしば合併号を出したり欠刊したりして、賛助会員並に読者の皆様、特に本誌を布教テキストにされている方々には、大へん御迷惑をかけ心より申訳なく思っています。今年よりは再びそのような事態にならぬよう総力を傾注する覚悟であります。

これまで合併・欠刊した誌代の分は先きへ繰り越し、途中値上げした誌代と共に通算しており、既に誌代御納入の方へは、これにもとづいて領収書を差上げていますが、未納の方へは通算の結果をお通知申上げますので、それによつて御納入のほどお願い申上ます。なお一層御理解ある御支援をたまわりますよう。

△鷲峰会▽

鷲峰賛助会員とは宗門有為の人材を養成、本誌を発行、そして全国各地に擊鼓宣令する鷲峰会青年運動に対して、毎年、年間三千円の資金を志納することによつて、この運動に参加し、運動の精神的・経済的原動力となる人々のことです。

鷲峰会発足以来過去四年間、宗門に新風を巻き起し、その存在が認められるようになつて來ましたのも、ひとえに賛助会員の努力のたまものと感謝に堪えません。

今年三月には鷲峰学生僧が立正大学身延山大学より大量に卒業し一丸となつて立正安國の法戦に挺身する段階となりました。「兵はあれほども弾丸がない」ということが、敗戦の一因でもありました。どうか一人でも多くの方が賛助会員として此の運動に参画され、広宣流布の喜びを共に分ちあうよう切にお願い申上げる次第であります。

編集後記

★昭和四十二年の第一回の在教は正月七日、横浜大業物産本社を会場とした「法華經講録の集い」でした。昨年十一月より三回目の集いでしたが、横浜近郊はじめ東京、千葉方面よりも本誌々友三十数名が集り、新年にふさわしい盛会でした。★講義は口高主幹の一私教の歴史観と信仰の主体性」と題するもので、現代仏教学会の新伝説年代考によつて旧来の正像末央觀のア居が究明され、日蓮大聖人が像法後期の人として宋法の唱導師とはいえないと批判されているのに對し、これを法華經信仰の主体性をもつて痛烈に破折、慈眉の開かれる思いでした。★なお横浜の集いは毎月第一土曜に定期的に開かれ、二月は立正大学教授執行海秀先生の講義が予定されていますが、蓋し全国各地、隨時隨所に、このような集いが開催されるようになり、それも講義、座談会などまらず、誌友一丸となつて街頭に撃鼓宣伝するという立正安國の実践運動が、燎原の火の如く展開されて行かねばならないと思ひます。誌々友諸賢の奮起をお願いする次第です。

鷺峰二月号

昭和四十二年
第五卷

通卷 第二号
第三十三号

定価五十円 送料二十五円

昭和四十二年二月五日
印 刷
昭和四十二年二月十日
發 行

編集兼發行人

山梨県身延町波木井三区醒悟齋本妙庵

日 高 白 象

印刷所 山梨県身延町梅平

藤田印刷所

山梨県身延町波木井三区四一二五

鷺峰会

電話(身延山)四五九番
振替(甲府)二〇九三番

半年分 四五〇円 (送料共)

一年分 九〇〇円 (送料共)

一年分 三〇〇〇円 (分納可)

誌代
贊助会費